忌中と喪中

杉谷 伊吹

皆様こんにちは、如何お過ごしでしょうか。今回は、人が亡くなった際に特別な期間として設けられている「忌中」と「喪中」の意味を書いていこうかと思います。

まずは「忌中」についてです。「忌中」とは亡くなった日から七七日（しじゅうくにち）法要までの期間を指し、この期間が終わることを「忌明け（きあけ）」と言います。

かつての日本人は、老いは身体に「穢れ」が溜まる事によって、病いは「穢れ」が呼び寄せる「疫病神（やくびょうがみ）」に憑かれる事によって起こると考えていました。今では感染症などの病気は、細菌やウイルスが原因であると分かっていますが、このことが分かる以前は、目に見えない悪神のせいであると考えてしまったのも無理はありません。また感染ルートとなりやすい血液も「穢れ」とされたことから、お産や狩猟なども不浄とされました。

日本各地に残る多くの墳墓や古墳の遺蹟は、遅くとも弥生時代後期には、死者が礼拝の対象となっていたことを表しています。ですから葬儀はねんごろに行いながら、同時に「穢れ」や「疫病神」が広まることは避けなければなりません。そこで、周囲と接触しないために、同居していた親族は故人の魂と共に家の中に引きこもったのです。この間、着替えや沐浴することなく粗食を続けました。卑弥呼の頃に伝わってきた道教では、憐れみを受けるような姿でいることにより、祖霊から恩恵を受けることができるとされていたからです。これを「忌」と言い、この期間が「忌中」となります。つまり「忌中」とは、仏教伝来以前からの宗教観に由来する習俗なのです。後に仏教的な解釈を付けて、閻魔大王による罪の判決に沿って、魂の行き先が決まるまでの期間を「忌中」としている宗派もあります。この場合、葬儀から七七法要までは亡くなった方は霊魂であるということで、法要の際に用いる熨斗は「御霊前」、これ以降は「御仏前」と変わります。ただし、浄土真宗の教えでは全ての方を仏として礼拝しますので「御仏前」だけになります。現在は病気の原因の多くが明らかになっていますから「忌中」は一つの習俗として、無理することなく故人の死を受け止めるための期間として過ごせばよいと思います。

次は「喪中」についてです。「喪中」とは七七日法要が終わってから、おおよそ一周忌法要を終えるまでの間をいいます。明治二十九年までは「服忌令（ぶっきりょう）」という法律によってかつて「喪中」・「忌中」の期間が定められていましたが、現在は法的な規定はありません。「喪」は大切な人の死によって、悲しみや苦しみ、虚しさに心がとらわれている状態ですから、「喪中」は残された人が現実を受けとめ穏やかな日々をおくることが出来るようになるまでの期間と考えてはいかがでしょうか。身内の葬儀があった後、いつ結婚式をしたらよいかということなどは、この事を判断の基準に考えればよいと思います。「喪中」は正月行事をしないという風習から生まれたのが「喪中はがき」ですが、この期間もそれぞれの判断でよいかと思います。

今回の「忌中」と「喪中」は仏教由来の習慣というわけではなく、日本人が伝えてきた様々な宗教的要素が混ざり合った習俗で、これまでも時代とともに変化してきました。今、かつてないほどのスピードで価値観が変わっている中で、これらの文化がどのようになっていくかを見届けていきましょう。

疱瘡神を降伏させている源為朝の絵
歌川国芳 作

能登半島地震

杉谷 淨

昨年十月、震度七の地震と記録的な水害に襲われた能登の輪島市を訪ねました。

最初に、当寺報恩講で何度も講師をお願いしております木越祐馨師の輪島市門前にある光琳寺を訪ねました。外から見ると屋根の一部にブルーシートが掛かっているだけですが、中を案内していただくと、あちこちにひび割れや段差が出来ていました。それでも生活には支障なさそうに見えるのですが、地盤が傾いてしまっており、半壊ということです。

次に訪れた輪島市内は、友人に車で案内してもらいました。地震発生から十カ月以上たっても、非常事態に対応しているという状態で、とても平穏な日常が送れるような状況にはなっていませんでした。この様な心が沈んでしまう中でも、子供たちが元気に遊んでいる姿に心が癒されました。このことは、先の見えない中で復興に励んでいる大人たちも同じであると感じました。二十代の頃、発展途上国を旅している時に、貧しい生活の中でも子供たちの笑顔にどれだけ救われたのかを思い出しました。

皆が安心して生活できるようになるまでは、まだ何年もかかると思いますが、微力ながらもより添っていければと思っています。今年の春彼岸に行ないます能登の障害者支援事業所の写真展も是非ご覧になってください。

門前の光琳寺。外からは被害の様子はうかがえませんが、中に入ると地震のすさまじさがわかります。

輪島朝市通。火災で焼け落ちた瓦礫は撤去され、基礎が剝き出しになっています。

輪島市内にあった 9 つの小学校のうち 6 校は、河井小学校のグラウンドに建てられた仮設のプレハブ校舎で集約して授業を行っています。

高台にある輪島中学校への通学路は、車道部分が崩落し、子どもたちは残った右端の歩道を通って通学しています。

絵本の紹介

杉谷　登紀子

『ルリユールおじさん』

作・絵　いせ　ひでこ
講談社　二〇一一年

作年の夏、パリオリンピック・パラリンピック期間中、パリの街の様子がテレビに映る度に思い出していた本です。

ある朝、少女ソフィーの大事にしていた植物図鑑が壊れてしまいました。本屋さんには新しい植物図鑑がたくさんありますが、ソフィーはこの図鑑を直したいのです。ソフィーは、街で出会った人から、「ルリユールのところへ行ってごらん」と言われます。ソフィーは図鑑を抱えながら歩き回り、ルリユールおじさんの店を探しあてます。おじさんは、店の前に立っているソフィーを店へ招き入れます。おじさんは、ソフィーの図鑑を直すことにします。作業場で、二人がおしゃべりしている間、おじさんの手によって少しずつ本が修復されていくのです。

ルリユールおじさんは、明日までに本を直すことを約束します。次の日の朝、ソフィーが、おじさんのところへ行くと、窓から、アカシアの表紙の本が見えます。植物図鑑は、新しい本に生まれ変わっていました。その後、ルリユールおじさんの作ってくれた本は、二度と壊れることがなく、大人になったソフィーは植物学の研究者になります。

ルリユールとは製本、装丁をする職人のことです。フランスでは、長い間、出版・印刷業者が製本することが認められておらず、仮綴じされた本を購入者がルリユール職人に製本を依頼していました。なぜかというと、ルイ十四世が大変な愛書家で、印刷と製本を完全に分業にしてしまったからです。そして王侯や貴族は優秀なルリユールに依頼して、豪華な革張り、泊押しの装丁の本を作らせていました。（現代のフランスでは日本と同じように、印刷・製版は分業でありません。）

製本にはおよそ六十もの工程が必要で、すべて手作業でできる製本職人はごくわずかだそうです。この本のルリユールおじさんは実在の人物です。一九二六年生まれ、アンドレ（Andre）さん。作者のいせひでこさんは、偶然、パリの街角で見かけた作業風景が忘れられず、一ヶ月後に再び戻って来てインタビューをしたそうです。いせさんは、ルリユールおじさんの本づくりに魅せられて、毎日通ってスケッチをし、この物語を仕上げたそうです。

ルリユールおじさんがソフィーの本を修復している夜、亡くなったお父さんのことを思い出す場面が最も好きです。同じくルリユール職人だったお父さんから言われた言葉は、

「本には大事な知識や物語や人生や歴史がいっぱいつまっている。それらをわすれないように、未来にむかって伝えていくのがルリユールの仕事なんだ」

「修復され、じょうぶに装丁されるたびに本は、またあたらしいいのちを生きる。」

そして、おじさんは、お父さんと同じようにわたしも魔法の手をもてただろうか、と思いながら眠りにつくのです。

文化庁が二〇二四年九月十七日に発表した二〇二三年度の「国語に関する世論調査」では、一か月に電子書籍を含め、本を一冊も読まない人が六割を超えていました（全国の十六才以上が対象）。今後もこの傾向は増えていくと思われます。でも、本をこよなく愛する人は決していなくならないと固く信じています。「ルリユール」はもう一度つなげるという意味の動詞です。今は本とのご縁が無くなっている人たちが、いつの日か、人生にとってかけがえのない本たちと出会うことができますように。

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある**「いちょう館」二階**にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内**「真宗会館」一階囲炉裏の間**にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっています。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師　徳法寺住職　杉谷淨

三月　足利仏教 八　東山文化と大衆文化
四月　足利仏教 九　戦国大名の登場
五月　足利仏教 十　臨済宗と日本文化

昨年に続き足利時代となります。貴族社会とそれに続く源氏や平家、足利といった公家系の武士が没落する一方で、民衆が経済力を背景として社会的な影響力を持ってきます。これによって、それまで上流社会のものであった様々な文化が民衆の中にも流れ込んできました。これが御伽草子（室町物語）に代表される大衆文化です。経済力に加えて武力も手に入れた民衆が起こしたのが、一揆や下剋上です。このような身分社会の崩壊をきっかけにして戦国時代が起こることになります。

この時期、最も権力者に重用された宗派が臨済宗でした。金閣寺や銀閣寺、東福寺、龍安寺など、京都の主だった観光寺院はこの頃に創建された臨済宗寺院です。臨済禅から生まれた「わびさび」が、日本文化の源流となっていきます。仏教が文化として広がっていく中で、民衆も自らの意思によって宗派を選ぶようになっていきます。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

徳法寺春彼岸

「のとからの風」写真展

三月十五日（土）から二十三日（日）まで

昨年、能登を襲った地震と水害によって被害を受けた障害者支援事業所の取り組みを写真で紹介します。

春彼岸中日法要及び永代経法要

三月二十日（木・祝）午後一時より

読経、当寺住職法話の後、門前の井上氏からの現場報告があります。

表題揮毫　中田　八千代

徳法寺　石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL　０７６（２４１）５２１９

ホームページ　http://tokuhou-ji.com